

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の風水集落景観に関する植生学的研究 －多良間島を事例として－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2010-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): Feng Shui forest, forest landscape management, Okinawa 作成者: 陳, 碧霞, 仲間, 勇栄, Chen, Bixia, Nakama, Yuei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16807

沖縄の風水集落景観に関する植生学的研究

—多良間島を事例として—

陳 碧霞¹・仲間 勇栄²

¹ 中国福建師範大学経済学部講師（日本学術振興会特別研究員）

² 琉球大学農学部亜熱帯地域農学科教授

【要約】

琉球の風水集落には、村抱護と呼ばれている林帯がある。この村抱護の林帯は、集落後方の森とともに、集落を取り囲むように造成されている。さらに各家屋を囲むように、フクギの屋敷林が植えられている。中国や他の東アジア地域の風水樹の使い方は象徴的であるのに比べ、沖縄の場合は、風水的欠落のある地域を補うため、植林の仕方が機能的に配置されている。沖縄は平坦な島々が多く、厳しい自然条件から島を守るため、独特な風水樹のレイアウト構造になっている。本研究では、多良間島を事例に、集落景観、村抱護、屋敷林及び腰当森(クサティムイ)の構造を明らかにした。村抱護の林帯の上層では、フクギとテリハボクが優占種になっている。集落北側の林帯は、自然林を修復する形で人工林が補植されている。抱護の下層植生には多くの種が見られ、植生の多様性を示している。これらの景観は冬の北風と台風時の東風を想定したレイアウトになっていて、東アジアの集落風水景観の中でも、より自然環境に適応した独特な島嶼型景観を形成している。

1. 序論

中国では風水は何千年もの昔から行われており、都市計画の立案、集落立地の選択、そして共同墓地建設のような環境デザイン面に多く利用されてきた。Xu(1998)は、風水が景観分析と計画立案のための実行可能なモデルとなりえることを提案している。Yu(1998)は、風水の文化的な、そして生態上の重要性を詳説した。Mak(2005)もまた、オーストラリア、香港における多くの建築家のアンケート調査から、風水モデルが理想的な景観の認識と一致していることを報告している。

風水地理の形勢派は、地形上の形態を観測する。その地理的要因は、龍、砂、水、穴、そして方角である。風水の理想的な場所は、周囲が山または丘で取り囲まれていることである。玄武、朱雀、青龍、白虎を四神と呼ぶ。良い風水を備えた場所は、玄武と呼ばれる後方の丘または山脈、白虎と呼ばれる右側の丘、青龍と呼ばれる左側の丘、そして朱雀と呼ばれる正面の小さな丘を有しなければならない。そのような風水の場所は住民に幸運、繁栄、そして幸福をもたらすと考えられている。場所選択の適切な基準として、地形を重視する見方は、山地の多い南東中国でよく見られる。しかしながら、山岳地帯に加えて、他のタイプの地形での風水の応用についての報告はほとんどない。

1.1 琉球王国への風水の伝来及び普及

風水は琉球に14世紀末に福建省からの閩人の移民とともに導入されたといわれている。琉球では閩人の住む久米村からはじまって、琉球における生活の各面に広がっていった(都築、1990)。風水は、1730年代以降、蔡温というすぐれた政治家によって、琉球王国内での住宅、集落、墓地、国都などの造成から、山林の管理までの広い範囲にわたって応用されていった(町田、都築、1993)。

蔡温は、琉球王国の風水景観の形成および発展に重要な役

割を担った。Smits(1999)は、王国のイデオロギー、施設、政治、文化および造林や河川の改修などに関する、蔡温の改革の系統的な研究を行っている。蔡温は約2年間中国の福州に滞在し、中国の隠者から風水について学んでいる。球陽の記録によれば、蔡温は、1713年に毛文哲とともに首里城の風水鑑定をおこなっている。蔡温らは北西の城間地方が荒廃しているため、その地形を改善するためにリュウキュウマツの木を含む植林を提案している(島尻、1990)。風水の望ましい景観や生きているエネルギーを保存するために、蔡温は植林の重要性を強調していたのである(都築、1997; 仲間・幸喜、2002)。

蔡温は林学の分野で偉大な貢献をしている。蔡温は「山林真秘」の中で、山地の斜面と森林成長の関係について論じている。また蔡温は山地の形状が「山気」を集めることにより、森林成長を促進するのを助けることを述べている。蔡温はまた植林の仕方として、魚鱗形による植林法を推奨している(仲間、2002)。

1.2 風水集落

伝統的な集落景観は、風水師の指導の下で計画され造成された。風水集落の道は碁盤型に設計されている。道路で区画された敷地内に家屋は作られる。これは農地の地割制(定期的に土地を割り変えること)と関連していて、1737年以前は、そのような碁盤型に設計された集落はみられない(仲松、1997)。仲松によると、琉球諸島には約180の碁盤型に設計された集落が存在していたという。それらの大部分は、海岸域の砂質堆積地に集中している。

集落景観を改善するために、風水地理が応用されている。たとえば、1857年、風水師が沖縄本島北部の2つの村(真喜屋と稲嶺)の風水鑑定を行っている。1864年には、波照間島と与那国島を除く八重山諸島における集落の風水鑑定が実施されている。

真喜屋と稲嶺の事例では、風水師がフクギの植栽や道路には

みだしている枝の切り取り、風水所にかかる畑地内への植林などのアドバイスをしている(玉木、1990)。

抱護は沖縄の風水を考えると、非常に重要な概念である。抱護には家屋を取り囲む屋敷抱護、集落を取り囲む村抱護、複数の集落を取り囲む間切抱護、海浜域の浜抱護などがある(仲間、2002)。村抱護には主にリュウキュウマツやフクギが植えられている。屋敷抱護にもフクギが使われ、1~2列並びで植えられている。

1.3 先行研究と研究課題

風水集落の屋敷林の構造についてはChen(2005)らが報告している。仲間(2002)は沖縄本島における風水集落の森林景観について報告し、風水村が生態学的に重要な生物多様性を含んでいることを結論づけている。仲間および幸喜は、備瀬集落におけるフクギ林に対する住民の高い意識について報告している。

Webb(1995)は、香港の高度に都市化された地域の中で、風水樹を構成する森林が生態学的な景観を形成しているとしている。韓国においては、風水樹は欠陥のある風水景観を補い、気を増強する機能があることを渋谷(2003)及びWhangら(2006)によって報告されている。

江戸時代の農学者である宮崎安貞は、森林の成長にとって土質が重要な要因であることを指摘している。それとは対照的に琉球では自然環境の違いから山形が森林との関連で重視されている(仲間、2002)。

本研究では、島嶼地域における風水景観の特徴を探るため、多良間島を事例に調査した。その理由の一つは、1742年に蔡温が当時の宮古島の頭だった白川氏恵通に命じて、多良間島で村抱護を造成させている歴史的事実があるからである(仲間、2003)。

村および浜抱護は第二次世界大戦の前までは、琉球列島において一般的に見られる光景であった。しかし、コンクリート製家屋が普及すると同時に、屋敷林などは伐採され消滅していった。琉球列島の中でも多良間島には、風水集落の村抱護が最もよく保存されている。その他の地域で屋敷林がよく保全されているところは、本部町の備瀬及び渡名喜島である。

2. 調査地と調査方法

2.1 調査地の概況

多良間島は北緯24度39分、西経124度42分、宮古島の西約67km、石垣島の北約35kmに位置する。宮古島と石垣島は日本列島の最南端にある先島諸島の一部である。多良間村は多良間島と多良間島の北西約12kmに位置する水納島を含む。多良間島は平らで楕円形の島である。島の北側には標高32.8mの平らな丘がある。多良間島の総面積は20.05km²である。

集落は島の北側の丘のふもとにまとまってある。農地の大部分は村の外に広がっている。多良間島は琉球石灰岩が風化してできた島尻マージでほとんど覆われている。表土は痩せていて保水力が低い。かつては広範囲でサツマイモ、大麦、キビが栽培されていた。最近ではサトウキビが多良間島の主要農産物である。

また牛とヤギの飼育が、重要な産業になっている。2005年3月現在の島内の総人口は1,454人で、うち男性は793人、女性は661人である。

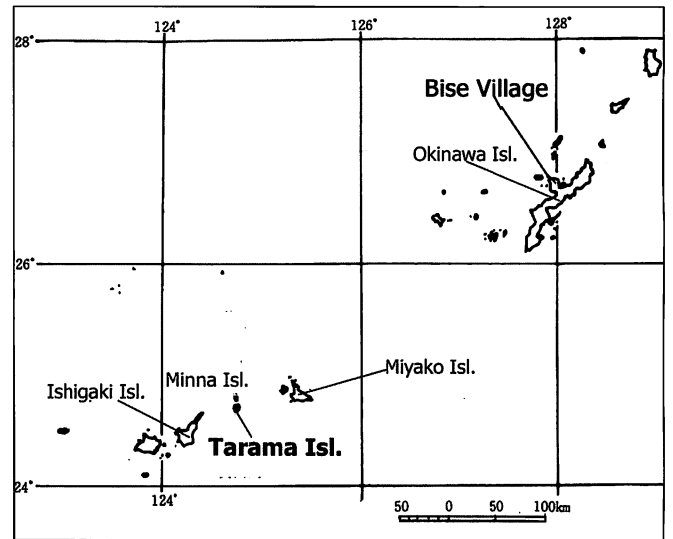


図1. 多良間島の位置図

2.2 調査の設定と方法

植生構造を解明するために、抱護の中で5つのプロット、集落北側で3つのプロットを設定し調査した。村抱護の林帯は1.8kmで、1742年に植えられたといわれる。林帯の一部は畑への通行のために伐採されている。村抱護の林帯の中で最も人の介入が少ない地域を調査地を選んだ。林帯の幅は約12mで、最も高い木は約13mだった。プロット1~5は12×13mの長方形で、プロット6~8は半径15mの円形プロットだった。プロット6は村の共有墓地にあり、また、プロット7と8は海岸の近くにある。

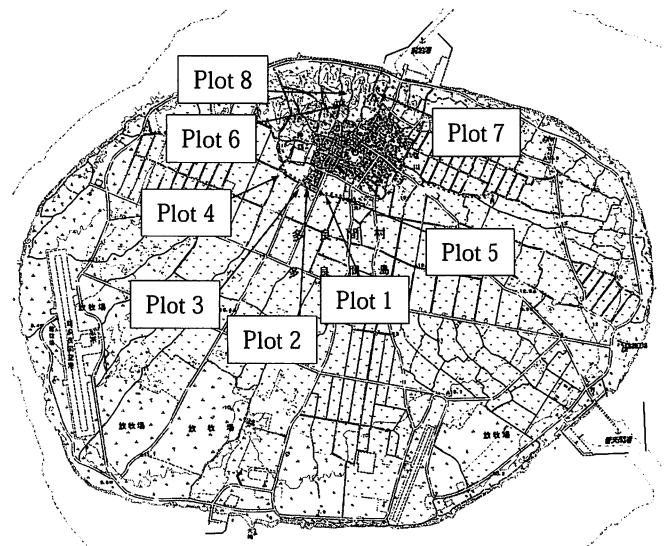


図2. 調査プロットの位置

3. 調査結果

3.1 多良間島の風水レイアウト

典型的な琉球型の風水集落景観をよりよく理解するために、集落の概略を示したスケッチと1945年にアメリカ軍が撮影した航

空写真を利用した。

図3によると、集落後方の丘(クサティムイ=腰当森)に、運城御嶽、泊御嶽、嶺間御嶽など、多くの御嶽がみられる。琉球では、集落の後方にある密閉した森の丘を腰当森と呼んでいる。北を背にした集落の左側には、天然の湧水のシュガーガー、フシャトゥガーそしてアレーキのため池がある。

集落の西側にはトゥカパナ(御嶽)やンタバルウガン(御嶽)がある。八重山遠見台は集落の最も高いところに位置している。村抱護の林帯は、集落の前方を囲むように植えられている。琉球列島における理想的な風水景観は、御嶽を基本に配置されている、と推測できる。

図3によれば、多良間島の所々に残っている森林の配置は、ほとんど御嶽のまわりと丘を背にしていたことが分かる。写真1にみえる黒い帯の林帯は村抱護で、東西2つの丘を結ぶようにして集落の正面を取り囲んでいる。伝統的な風水モデルと多良間島

の集落配置を比較すると、北側に腰当森、東側にピトゥマタウガンと塩川御嶽が、西側にトゥカパナと八重山遠見台が、それぞれ玄武、青龍、白虎の風水配置を表徴している。村抱護が朱雀と朝山の機能を果たしていることは明白である。

筆者らは、玄武(北)、青龍(東)、白虎(西)、朱雀(南)の4つの象徴を結ぶ東西南北の主要な道に沿って、2つの交差するラインを描き出した。すると、ブンヤー(旧番所)が、4つの象徴を結ぶ交点に配置されていることが明らかになった。ブンヤー(旧番所)は集落の中で最も風水的によい場所である穴に選ばれて建てられたものだとは推測できる。仲筋と塩川の家々は、南北に伸びる道によって分割され、ブンヤー(旧番所)のまわりの開けた空間に散居して形成されている。

まとめると、琉球型の風水集落景観(写真1)は、屋敷抱護、村抱護、浜抱護から成る異なった要素を持つ三つの円で形成されているのが特徴である。

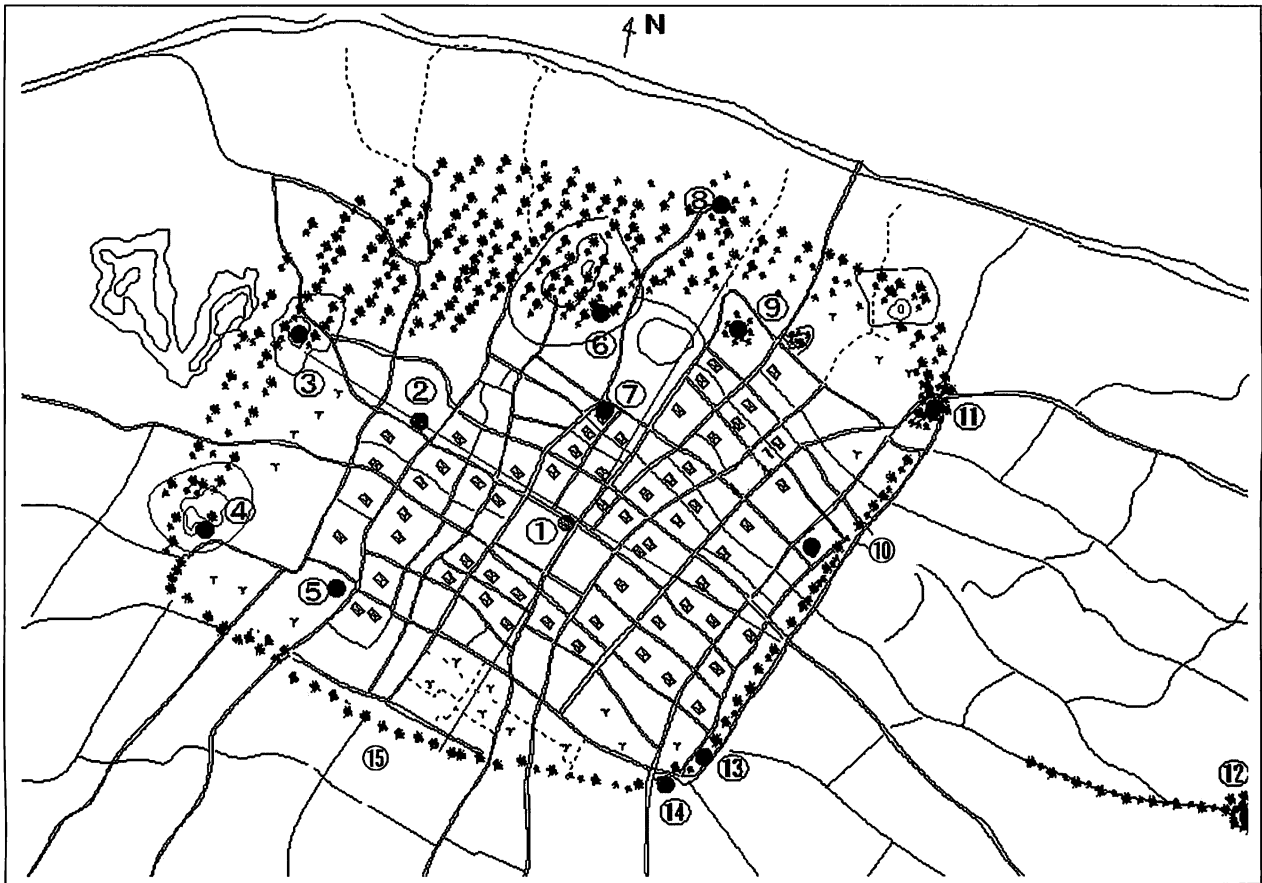


図3. 集落景観のレイアウト

- | | |
|---|--|
| <p>① ブンヤー(旧番所)：ブンヤー(旧番所)は昔、ここにあった。そこは風水上、最高の立地(穴)であるとされた。</p> <p>② ンタバルウガン：仲筋部落のための聖地で、毎年8月に壮大な祭り(8月踊り)が開催される場所。</p> <p>③ 八重山遠見台：島で標高が最も高い場所で、琉球王朝時代に島の近海を通り抜ける船を見張るのに使われた。</p> <p>④ トッカパナ：仲筋部落の聖地。</p> <p>⑤ ナガシガー：鍾乳洞の湧き水のある神聖な場所。</p> <p>⑥ 運城御嶽：最も古い聖地の一つで、海の安全を祈願する場所である。</p> <p>⑦ アマガー：鍾乳洞の湧き水。</p> | <p>⑧ 泊御嶽：海の安全を祈願する場所。</p> <p>⑨ 嶺間御嶽：聖地。</p> <p>⑩ ピトゥマタウガン：塩川部落の聖地で、毎年8月に盛大な祭り(8月踊り)が開催される場所。</p> <p>⑪ シュガーガー：鍾乳洞の湧き水のある神聖な場所。</p> <p>⑫ 塩川御嶽：神聖な場所で、5m間隔で植えられたフクギの林帯が両側に伸びている。</p> <p>⑬ フシャトゥガー：鍾乳洞の湧き水のある神聖な場所。</p> <p>⑭ アレーキ：雨水が集まり自然にできた池。</p> <p>⑮ 抱護：林帯は集落の前方から後方の森にかけて、集落を囲むようにカーブを描いている。</p> |
|---|--|



写真1. 多良間島の航空写真 (1945年に米軍が撮ったもの)

- | | |
|------------------------|--------------|
| (1) ブンヤー(旧番所) | (5) 村抱護 |
| (2) クサティムイ(嶺間、運城、泊の御嶽) | (6) 塩川御嶽 |
| (3) 八重山遠見台 | (7) ピトゥマタウガン |
| (4) トウカパナ | (8) シュガーガー |



写真2. 村抱護の林帯



写真3. フクギ屋敷林で囲まれた集落遠景

3.2 村抱護の特徴

表1,2は、村抱護内の調査区の樹種構成を示したものである。優占種はフクギで上層木の約64%を占めていた。次いで、テリハボクが約20%となっている (写真4)。プロット1~5でフクギの割合は68.3%、73.8%、71.2%、52%、37%となっていた。テリハボクは同様にプロット1~5の中で29.3%、7.1%、5.8%、48%、

29.6%となっていた。その他に、モクダチバナ、アカテツ、マルバチシャノキ、タブノキ、デイゴ、ヤマグワなどの樹種が見られた。

全調査区におけるフクギの樹高の平均値は642.8cmから801.5cmの間に広がっている。フクギのDBHの平均値は17.6cmから27.6cmに及んでいた。調査区内のフクギの樹齢を推定するために、平田 (2006) による公式 ($DBH \div 2 \times 8$) を用いた。

表1. プロット1~5の主な上層樹種

樹種名	数量	%	平均樹高 [cm]	平均直径 (cm)	平均推定樹齡
フクギ	119	63.6	691.1	20.5	82.1
テリハボク	38	20.3	667.8	25.4	
モクダチバナ	12	6.4	631.2	15.3	

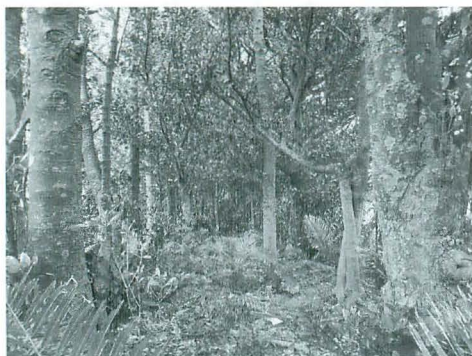


写真4. 村抱護の中の樹種構成



写真5. 村抱護内のフクギの合体木

表2. プロット別の上層木の樹種構成

	樹種名	数量	%	平均樹高(cm)	平均直径(cm)	樹高最大値(cm)	直径最大値(cm)	樹高最小値(cm)	直径最小値(cm)
Plot 1	フクギ	28	68.3%	651.8	17.6	1152	53.0	311	4.5
	テリハボク	12	29.3%	810.2	34.2	1048	55.3	622	17.5
	モクダチバナ	1	2.4%	414.0	10.0	—	—	—	—
総計		41	100.0%	704.6	22.6	1152	55.3	311	4.5
Plot 2	フクギ	31	73.8%	642.8	20.8	1058	58.0	208	3.7
	タブノキ	4	9.5%	497.8	13.5	745	18.6	331	7.2
	テリハボク	3	7.1%	680.3	32.5	892	38.9	420	29.0
	モクダチバナ	2	4.8%	391.0	5.6	432	5.7	350	5.5
	アカテツ	1	2.4%	426.0	5.1	—	—	—	—
	マルバチシャノキ	1	2.4%	534.0	11.9	—	—	—	—
総計		42	100.0%	611.9	19.6	1058	58.0	208	3.7
Plot 3	フクギ	37	71.2%	729.3	19.9	1088	84.8	235	2.6
	センダン	4	7.7%	683.8	20.4	819	27.4	373	5.7
	モクダチバナ	3	5.8%	452.0	6.2	582	7.4	317	4.4
	テリハボク	3	5.8%	557.3	24.4	765	44.6	263	10.2
	マルバチシャノキ	2	3.8%	369.0	4.9	388	5.1	350	4.6
	タブノキ	2	3.8%	549.0	13.2	727	18.5	371	7.9
	デイゴ	1	1.9%	934.0	53.8	—	—	—	—
総計		52	100.0%	683.0	19.2	1088	84.8	235	2.6
Plot 4	フクギ	13	52.0%	801.5	27.6	1208	60.4	202	3.5
	テリハボク	12	48.0%	628.6	23.7	977	55.2	287	5.8
総計		25	100.0%	718.5	25.7	1208	60.4	202	3.5
Plot 5	フクギ	10	37.0%	666.4	21.0	1171	34.2	328	5.2
	テリハボク	8	29.6%	549.6	12.6	840	22.8	350	4.1
	タブノキ	6	22.2%	747.5	17.2	971	24.1	590	6.0
	モクダチバナ	2	7.4%	474.0	7.1	503	9.0	445	5.2
	シマグワ	1	3.7%	806.0	23.8	—	—	—	—
総計		27	100.0%	640.7	16.7	1171	34.2	202	3.5

表3. 抱護内の下層植物リスト

樹種名	ア カ ギ	グ ミ モ ド キ	ナガミボチョウジ
	ア カ テ ツ	ク ロ ツ グ	ノ シ ラ ン
	ア コ ウ	ク ワ ズ イ モ	ハマサルトリイバラ
	ア ダ ン	ゲ ッ ト ウ	ハリツルマサキ
	イ ヌ マ キ	サキシマボタンヅル	パ ン ジ ロ ウ
	イ ボ タ ク サ ギ	シマヤマヒハツ	フ ク ギ
	オキナワシャリンバイ	ス ス キ	ヘクソカズラ
	エダウチチヂミザサ	セ ン ダ ン	マ サ キ
	エ ビ ヅ ル	ソ テ ツ	モクタチバナ
	オオシマコバンノキ	タイワンウオクサギ	モモタマナ
	オ オ バ ギ	タ ブ ノ キ	ヤ マ グ ワ
	オオムラサキシキブ	ツ ル ソ バ	リュウキュウガキ
	ガ ジ ュ マ ル	テリハノブドウ	リュウキュウカラスウリ
	キールンカンコノキ	テリハボク	リュウキュウコクタン
	ギ ン ネ ム	ナガバカニクサ	リュウキュウボタンヅル
ク チ ナ シ			
総 計	46種		

3.3 クサティムイ(腰当森)の樹種構成

プロット6~8のデータは集落の後方にある北側の丘で調べられたものである。表4は上層の樹種の特徴を示している。表4によれば、プロット6~8の上層の樹種は、それぞれ8、10、8種であることがわかる。プロット6での優占種はモクタチバナで、全ての高木の約61%を占めていた。プロット7での優占樹種はテリハボクで約49%、プロット8での優占樹種はリュウキュウガキで約46%を占めていた。

プロット8の出現種数の中で、高木のテリハボクは23.4%、フクギは22.5%、合計46%を占めていた。クサティムイ(腰当森)の調査区の下層には約22種の種数が見られた。表5に全ての下層樹種名を載せている。全調査区で見られた優勢な種は、クワズイモ、リュウキュウガキ、フクギ、イヌマキ、ナガミボチョウジであった。

プロット6(写真6)は集落の共同墓地の中にある。プロット6では、主にモクタチバナ、リュウキュウガキ、アカギ、フクギ、タブノキなどが、それぞれ約61.1%、13%、9.3%、7.4%、5.6%を占めていた(表4)。プロット6のアカギは樹高とDBHの平均がそれぞれ829.3cm、21.3cmであった。プロット6で見つかったフクギは樹高とDBHの平均がそれぞれ737.4cm、27.1cmであり、その平均の樹齢は85.2年と推定された。フクギの樹齢は最大で171.2年であった。アカギとフクギは人工植栽の可能性が高いとみられる。

プロット6において下層植生は8種のみで、他に比べ希薄であった。このことから集落の住民によって、墓地環境を維持するために、定期的の下層の草や低木を切り払う作業が行われてきたことが推測できる。

プロット7(写真7)は海岸線から110mほど離れた海に面した斜面に位置している。最も多い樹種はテリハボクで全高木の約50%であった。その他に多数を占めていた種はイヌマキ、アカテツ、リュウキュウガキなどであった。プロット6や8と比較して、上層と下層には多くの種が出現していた。

プロット7の上層木の総数は81本であった。これはプロット6及び8の80%以下である。上層木の本数が少ないため、開けた空間ができ、そのため下層植生が発達することになった。下層種ではホウビカンジュヤトゲカズラなどが多く出現している。プロット7ではフクギは1本も見られなかった。



写真6. プロット6の下層状況



写真7. プロット7の植生



写真8. プロット8の植生

表4. クサティムイの上層植生樹種

	樹種名	数量	%	平均樹高(cm)	平均直径(cm)	樹高最大値(cm)	直径最大値(cm)	樹高最小値(cm)	直径最小値(cm)
Plot 6	モクタチバナ	66	61.1%	402.0	4.2	840	12.1	196	1.9
	リュウキュウガキ	14	13.0%	444.9	5.2	639	10.0	239	2.8
	アカギ	10	9.3%	829.3	21.3	1134	42.8	434	7.0
	フクギ	8	7.4%	737.4	27.1	1047	49.3	191	2.0
	タブノキ	6	5.6%	641.0	11.5	811	19.4	430	4.0
	アカテツ	2	1.9%	432.5	2.6	451	2.8	414	2.4
	その他	2	1.8%	550.0	10.7	—	—	—	—
総計		108	100.0%	489.4	8.1	1134	49.3	191	1.9
Plot 7	テリハボク	40	49.4%	982.4	21.4	1300	43.0	227	5.1
	イヌマキ	17	21.0%	231.2	1.5	306	1.9	126	1.0
	アカテツ	8	9.9%	249.3	5.3	370	29.0	197	1.4
	リュウキュウガキ	5	6.2%	255.8	2.9	300	3.9	185	2.2
	アカギモドキ	4	4.9%	215.3	1.6	250	2.2	185	1.0
	オオバギ	2	2.5%	160.5	1.6	171	1.7	150	1.4
	モモタマナ	2	2.5%	605.0	15.0	952	27.6	258	2.4
その他	3	3.6%	292.0	2.8	—	—	—	—	
総計		81	100.0%	614.4	12.2	1300	43.0	126	1.0
Plot 8	リュウキュウガキ	51	45.9%	261.6	2.7	484.0	5.4	121.0	1.3
	テリハボク	26	23.4%	1111.5	24.4	1381.0	46.3	398.0	4.9
	フクギ	25	22.5%	349.6	4.1	933.0	13.3	138.0	1.4
	イヌビワ	3	2.7%	326.0	3.3	389.0	6.6	252.0	1.6
	アカテツ	2	1.8%	247.5	1.1	252.0	1.1	243.0	1.1
	モモタマナ	2	1.8%	982.0	15.6	1074.0	19.8	890.0	15.6
	その他	2	1.8%	420.0	5.9	—	—	—	—
総計		111	100.0%	498.2	8.3	1381	46.3	121	1.1

プロット8(写真8)はプロット7より少し内陸側にある。プロット8はプロット7と6の中間域として設定された。プロット8の上層はかなり密集しているが、下層植生は未発達であった。上層の中で最も本数密度の高い種はリュウキュウガキ、テリハボク、フクギであった。しかし、フクギとテリハボクの太さが異なることは注目に値する。テリハボクのDBHの平均は24.4cmであったが、フクギは4.1cmであった。テリハボクのDBHの最大値は46.3cmだったが、フ

クギは13.3cmであった。これらの数値から、それぞれフクギの樹齢を平均16.4年と最大53.2年と推定できる。一般にテリハボクはフクギよりも成長が早い。このことから、もともとテリハボクが生えていた自然林の中に、後発でフクギが生え始めたと考えられる。

表5. クサティムイ内の下層植物リスト

樹種名	アカギモドキ	シマヤマヒハツ	ハスノハギリ
	アカギ	ソテツ	フクギ
	アカテツ	タブノキ	ヘクソカズラ
	イヌマキ	ツゲモチ	ホウビカンジュ
	オオシマコバンノキ	テリハボク	リュウキュウガキ
	オオバギ	トゲカズラ	リュウキュウコクタン
	クスノキ	ナガミボショウジ	
	クワズイモ	ノシラン	
総計	22種類		

4. まとめと考察

4.1 島嶼地域における風水集落景観の特徴

風水の形勢派は龍、砂、水、穴、方角などの要素が、理想的な居住地の形成要因であると考えている。形勢派は最初に土地構造と地勢を観察し、それから場所と方位を決定する。周囲の丘は、風水上、気(生命力)を蓄えていることが求められる。

中国の主な地域では、地形上の観察が強調され、風水的観点から改善法則(中国でいう"禰"(ブ)、韓国でいう"禰補"(ビボ)、沖縄でいう抱護)を適用する。幸運は水と共に流れてしまうと考えるため、幸運を維持するために中国本土では橋や塔、パビリオンのような人工の建物や、いくつかの樹木などを、水口の中でも最も低い場所に造成した。韓国語の"禰補"は、欠陥のある風水景観を補助する手段という意味であり、森林は不完全な風水地形を生命力に満ちた地形に補完するために用いられてきた。

抱護とは、沖縄風水の概念の基本用語である。村抱護は集落の前方を囲みながら東西に及ぶまでの林帯で、「クサティムイ」(腰当森・集落の後ろで保護されている自然林のこと)とともに集落を取り囲むようにあった。また、抱護は家屋、集落、近隣のいくつかの集落、海岸線を囲む林帯のことも指し、それぞれ屋敷抱護(家の周りを囲む森)、村抱護、間切抱護、浜抱護などと呼ばれる。

多良間島は、典型的な風水集落の景観構造である。それを明確にするために調査地として選定した。風水において本来は集落周辺の丘陵地形がその役割を果たすのだが、多良間島では村抱護の林帯が、実際に朱雀としての機能を果たしていることが判明した。植林は不完全な地形を補完するためである。後部、左右、正面の丘の上に植えられた抱護の林帯は、四神である玄武、青龍、白虎、朱雀を象徴したものである。四神の交差する点は最高の立地であり、これにブンヤ(旧番所)が位置している。集落の家々はブンヤ(旧番所)の周りの広く開かれた場所に集まっている。

要約すると、地勢を強調する中国本土の風水とは対照的に、琉球の風水集落は屋敷、集落の周辺を樹木で囲うのである。中国と韓国では、風水集落景観は周囲の地勢を蔵風得水(風を貯え、水を得る)の観点から注目する。対照的に、沖縄では、集落の家々は多層の林帯で囲む。クサティムイは後部の丘を構成

し、それが集落前方の村抱護に繋がって、集落全体を囲む。海岸域では浜抱護がつくられる。そのようなレイアウトを設定するのは、集落を冬の北風と夏の台風から守るためである。大陸と島嶼のレイアウトの違いは、自然環境の差異に起因しているのである。

4.2 集落後方の風水林と前方の村抱護

一般に村抱護では主にリュウキュウマツやフクギなどが植えられ、多様な植生を形成する。海岸域の浜抱護の樹種は、大部分はアダン、オオハマボウ、クロヨナなどである。リュウキュウマツは常緑樹で風水上好まれるため、村抱護に利用される。屋敷抱護には家屋を取り囲むようにフクギが植えられている。

多良間島には、風水の森や林が多く残っている。村の前方には村抱護が、後方には、クサティムイの丘がある。これは琉球島嶼型の風水集落の特徴といえる。そのレイアウトと森の構成の特徴について解明した結果、村抱護の林帯の主林木は2層構造であることがわかった。村抱護の中では、フクギとテリハボクが上層の優占種になっていた。対照的に、集落後方の樹種は、より多様であった。主な樹種は、リュウキュウガキ、テリハボク、モクダチバナ、イヌマキなどであった。村抱護の下層植生は46種、集落後方の森での下層植生は22種と少なかった。

人工植栽の村抱護の林帯とは対照的に、集落後方の森(クサティムイ)は、天然林と人工林の混交であった。クサティムイの植生は、人為による攪乱が少なく、天然更新による再生林が多い。集落前方の抱護の林帯と北側の森は、現在では、天然更新しながら多様な植物社会を形成している。

4.3 大陸型モデルと島嶼型モデル

風水樹を象徴的に利用する中国本土や香港、韓国と比較して、琉球の風水集落は、季節風や頻繁に到来する台風から集落を守るためにフクギを集落の周囲に植える、というようなより実践的な利用形態をとっている。フクギの屋敷林で囲まれた家々があり、さらに集落全体を村抱護が取り囲む。集落後方の自然林(クサティムイ)は、寒い冬の季節風から集落を守るために保存されていた。抱護には、村を囲むものから、複数の村を囲む大規模なものまであり、それらは地形ではなく植林によってその機能を果たしている。海岸域の浜抱護にはリュウキュウマツ、アダンなどが植

えられる。

中国本土と香港、韓国では、風水樹は一般に、集落の入り口でシンボルとして立っている。常緑樹は幸運をもたらすとされ好まれる。沖縄では、風水樹は、林帯を形成して家や集落、そして海岸線を取り囲むように存在し、強風から生活基盤を守るという機能的役割を果たしている。風水樹も中国の象徴樹と異なり、より機能的な樹種として、フクギ、テリハボク、リュウキュウマツ、アダン、オオハマボウなどが選定されている。

沖縄と中国・韓国を比較すると、風水のコンセプトは同じであるが、そのレイアウトと風水樹の利用の仕方において、大きな違いが見られる。中国大陸で発達した風水は、沖縄に導入され沖縄の自然環境に適合するように改良され応用されていった。要約すれば、中国は象徴的レイアウトであるのに比べ、沖縄はより機能的に配置を考え、それを強化するため風水樹もより機能的な樹種が選定されていることである。このような事例から、中国の大陸型モデルに比して、沖縄は風水タイプの島嶼型モデルとして区別することができよう。

追記:

- (1) 抱護: 抱護を直訳すると、文字通り「抱いて護る」という意味になる。理想的な風水地形では、周囲の丘が生気を抱えていることが求められる。ところが、琉球列島はいくつかの低い丘があるだけで、ほとんどが平地である。また自然環境が厳しく、夏に頻繁に襲来する台風と冬の強風に悩まされている。沖縄では、抱護は、家と集落の周りに木を植えることで不完全な風水地形を理想的な居住環境へと整えることを意味する。
- (2) フクギ: 和名ではフクギ、漢字では「福木」で、学名は *Garcinia subelliptica* である。
- (3) 御獄: 神聖な場所を意味する沖縄での一般的な言い方。御獄は普通、集落のはずれにあり、集落の人々が祖先の神々に幸福、豊穡、航海安全などを祈る場所である。御獄周辺の森林はよく保護されていて、御獄林を切ると祟りが起こると信じられている。そのため御獄周辺の森林は自然状態で保存されている。

References:

- Chen, Bixia, Nakama Yuei, and Kurima, Genji, 2005. A study on a Feng Shui village and layout of habitat embracing trees in Okinawa (I)-a case study of Tonaki Island-. *Journal of the Japanese Society of Coastal Forest* Vol. 5 No.1.
- Coggins, Chris, 2003. *The Tiger and the Pangolin-Nature, Culture, and Conservation in China*, University of Hawaii Press, Honolulu.
- Feuchtwang, Stephan, 1974. *An Anthropological Analysis of Chinese Geomancy*. Vithagna.
- Graham, D. C., 1961. *Folk Religion in Southwest China*, The Smithsonian Institution, Washington.
- 初島住彦. 1975. 『琉球植物誌』. 沖縄生物教育研究会.
- He, Xiaoxin, 1990. *The Source of Feng Shui*. Nanjing, China: South-East University Press. [in Chinese].
- 平田永二. 2006. 老齡フクギの樹齡の推定について. 『沖縄のフクギ(福木)林を考える』. 沖縄県緑化推進委員会. p41-46.
- 町田宗博・都築晶子. 1993. 「風水の村」序論—『北木山風水記』について. 琉球大学法文学部紀要. 史学・地理学篇. (36)
- Mak, Michael Y. and Ng, Thomas S., 2005. *The art and science of Feng Shui- a study on architects' perception*. *Building and Environment*. 40.
- 仲松弥秀. 1977. 古層の村・沖縄民俗文化論. 沖縄タイムス社. 沖縄.
- 仲間勇栄, 1984. *Sai On and Forest Policy*, in *Kinsei no Shomondai Shirizu 1: Sai On to Sono Jidai*, Ryukyu Shiposhy, Naha.
- 仲間勇栄. 2002. 村落環境の管理システムとしての山林風水の意義. *人間・植物学会雑誌* 2 (1): 39-46.
- 仲間勇栄. 2003. 宮古島の森の現在と過去. 宮古の自然と文化. 新星出版社.
- Nakama, Yuei and Koki, Zenfuku, 2002. *The significance of housing shelter forest and regional inhabitants' consciousness in island regions*. *Journal of the Japanese Society of Coastal Forest* Vol. 2 No.1.
- Odum, Eugene P. and Barrett, Gary W., 2005. *Fundamentals of Ecology*. P374-459.
- 渋谷鎮明. 2003. 朝鮮時代の林藪と禰補思想 —風水思想の論理による環境保全・管理—. 『農村空間の研究』(石原潤編) 農村の文化と空間認識. p413-428. 大明堂.
- 島尻勝太郎. 1990. 『沖縄の風水』(窪徳忠編). 思想沖縄の風水. 平河出版社, 東京.
- Smits, Gregory. 1999. *Visions of Ryukyu: Identity and Ideology in Early-Modern Thought and Politics*. University of Hawaii Press.
- 玉木順彦. 1990. 沖縄本島北部の風水資料. 『沖縄の風水』(窪徳忠編). 平河出版社. 東京.
- 都築晶子. 1990. 近世沖縄における風水の受容とその展開. 『沖縄の風水』(窪徳忠編) 平河出版社. 東京.
- 都築晶子. 1999. 蔡温の風水思想—「首里地理記」の景観論とその展開. 竜谷史壇 (111) pp.26-56.
- 『多良間村勢要覧』. 2005. 多良間村役場.
- Webb, Richard, 1995. *The Village Landscape, Beyond the Metropolis: Villages in Hong Kong* (editors, P.H. Hase and Elizabeth Sinn). Hong Kong: Joint Publishing.
- Wang, B.-C., Lee, M.-W., 2006. *Landscape ecology planning principles in Korea Feng Shui, Bi-bo woodlands and ponds*. *Landscape Ecology Engineering*, Vol. 2 No.2, 147-162.
- Xu, Ping, 1990. *Feng Shui: a model for landscape analysis*. Ph.D. dissertation, Graduate School of Design, Harvard University.
- Yu, K.J., 1998. *The source of ideal landscape: the cultural meaning of Feng Shui*. Beijing: Commercial Press. [in Chinese]

Abstract

In a typical Ryukyu "Feng Shui" village, a forest belt, known as village Ho:go, was planted to curve in the front and extend to the east and the west to embrace the village along with preserved forest on the rear hill. Lines of Fukugi trees (*Garcinia subelliptica*) were planted to embrace the houses. Compared to the more symbolic existence of Feng Shui trees in China and other regions in East Asia, tree planting on a large scale was used as a practical means to repair defective topography with little protection from the strict natural condition on flat islands in Okinawa. This study focuses on village layout, forest composition in the front forest belt, habitat embracing trees, and forest plantations on the back hill. *Garcinia subelliptica* and *Calophyllum inophyllum* are the predominant species in the upper storey in the forest belt. Forests on the mountain in the back of the village consist of tree plantation mixed with the remnant natural forest. A large number of species are also found in the under storey vegetation in the preserved forest. Thus, a Ryukyu Feng Shui village landscape, which embodies a symbiosis of the nature and human intervention and protects the village from the winter wind from the north and typhoons from the east, is an ideal village landscape pattern which is compatible to small isolated Island topography.

Keywords: Feng Shui forest, forest landscape management, Okinawa